

p. 23 註)の意味にとるならば、「風習の違いもないから」とすべきであると思はれ、又同章の他の所に「かういふ風にして異國を強勢極りない國に拵へ上げ」(二十二頁)とあるがこれでは意味が通らな。uno straniere potentissimo はアラゴンのフェルデナンドであるから「勢極めて強き一外國人を(イタリヤに)導き入れ」とすべきであらう。(リシオ、バード註及び本譯二十頁の事實参照)又譯者は *perché* を常に「それといふのも」と譯されてゐるがこれは現代イタリヤ語としては普通のこととそれ自體誤りではないがマキアヴェルリの場合には時に *perció* の譯にすべき場合があるのではないだらうか。たとへばリシオの註によれば、第二章 *フエラ*、公の實例について述べた場合に續く文章に於て(四頁)「マキアヴェルリは、一般論をなしてゐるのであるから、この場合も *perché* を *perció* (だから)の意味に譯し以下の文章を前文の説明の様にせずに一般論の様に譯して行く方がよい様に思はれる、かゝる例はたとへば第九章の中(七十五頁)にも見出されるし、*perché* のかゝる用法はマキアヴェルリのみならず十六世紀の作家に往々見られるものであるから(Cappuccini 辭典參照)リシオの註の様にした方がよい様に思はれる。

尙譯文の平明をはかられるため種々苦心してゐられるが往々あまりに卑近な用語を用ひられたため原意を知るに不適當ではないかと思はれるものもあるが、イタリヤ語でも十六世紀の用法やトスカナの方言などの困難さをもつたマキアヴェルリの主要著作を獨力で邦譯せられた努力に對して我々は心かなる敬意を表さねばなら

らない。

本選集は未だ第一卷君主論を出したのみであつて、ローマ史論兵法論、フイレンツエ史と卷を追ふことにこの選集の意義がいよいよ明瞭になつて來るだらう。第三卷以後如何なチキストによつていられるかは承知しないが、君主論以外の著作には註譯本が少くかつ部分的な場合が多いから譯者の苦心は一更である。譯者がかゝる點を見事に克服されてゐることを期待してやまないのである。(創元社發行、定價一圓六十錢) (鹽見高年)

埃及語小文典

岡島誠太郎著

一七九九年八月歴史上意義深いナポレオン一世の埃及遠征の結果偶然にも發見されるに至つたロセツタ石の出現を契機とし、天才ジャンポリオンの辛苦の解讀により眞に學術としての埃及學が誕生を見たのであつたが、其の後レブシウス、ブルグシュ、ゴドウィン、シヤバ、エマヌエル・ド・ルージェエ及び其の子のジャツク・ガストンマスベロ、ペトリイ等の幾多の英傑が障礙困難を突破し、孜々として研鑽に邁進した爲、埃及學は文字通り日進月歩長足の進歩を遂げ今や歐米諸國いづれも皆埃及學の講座を設置し互に妍を競ふの盛況を呈するに至つた。従つて西洋古代史在來の暗黒面も愈々解明せられ學界の爲に大いに貢獻するに至つた事は既に周知の事實である。

「埃及語に手をつけてから早くも十數年の歳月が經た」と其の自

序に於て述べてみられるが、著者こそ我が國に於ける新學の「草分け」たるの榮譽を荷負はれるべきであり、數多の先哲の踏分けし勞苦の跡を身自ら親しく體驗された事であらう。

謎とも云ふべき遠き世の死語を外國語と云ふ障礙を遁して十年一日の如く研究に従事された著者の努力に對し只々敬意を表するのみである。

今や十數年前艱を分けた開拓者としての苦勞が結果して此の文典が世に公にせられるに至つた事は小にしては著者にとつて非常な御喜びであると同時に同學の者にとつても寔に御同慶に堪へない次第であるが、更に大にしては今や啓蒙の域を脱し既に特殊研究の時代に這入つたと云はれる我が西洋史學界にとつてもこよなき贈物であると云はねばならぬ。感々著者の御健在を祈つて止まない次第である。

立派な健かな種子が蒔かれたのである。此の種子が今すく／＼と生長し第二、第三の埃及學者が我が西洋史學界に活躍貢獻する日の來るのを待望するのみである。(菊判九〇頁、奈良飛鳥園發行定價金壹圓)(豊岡堯)

Gordon East: The Geography behind History, 1938.

イースト 歴史にひそむ地理 地圖六四、一九四頁

今日、世界の支配者となつたといふ人間の誇りは、今も洪水とか、飢饉とか、氷による破壊とか、移動する沙漠とか、廣範圍に

亘る土壤の浸蝕等があると思へば、眞に空虚なものに過ぎない。此等の事件は物質文明が高度に發達した地方に於てさへも、自然環境が今尚ほ「バンドラの箱」の儘、存在してゐる事を強調してゐる。況や、自然の舞臺に不十分な武裝をもつて立つてゐた人間歴史の初期に於て、如何に此等が大きな障礙であつたか。それ故にこそ、その初期に於ては屢々「歴史は凡て地理である」との言葉が存在してゐたのである。然乍ら、歴史にひそむ地理に對し、それが絶えず指導的役割を演ずると考へるならば過誤を惹き起す事とならう。從來、地理的決定論者は完全なる地理的干涉を信じたが地理學が爲し得る事は、單に地理的背景の特性が人間の行動の一部を局限し、且つそれに影響するに役立つといふ事だけに基礎を置き、地理學の方法と技術とによつて、人間活動の背景を研究することである。端的に言へば、地理學者は歴史を合成する要素の一つを研究するのであつて、歴史といふ繚繞の入り込んだパターンを見付けやうと主張するものではなく、その探索の一つを試べるに過ぎない。而して、此の事は、歴史事件は時間に於てと同時に空間に於て發生し、その特殊の分化を除いては場所から分離出來ず、且つ人間の思想や行動が、一定の地理的環境に於て種々の程度に人間の努力の性質や軌道を制限するといふ基礎に立つて始めて行ひ得る。歴史の地理的背景を此の如く理解する事によつて地理學は歴史研究の内容を富ましめ、又深めしめ得るのである。

右の如き見地に立つてイーストは歴史にひそむ地理を論ぜんとするのであるが、彼は先づ「自然環境」を問題とする。この自然環